

京極読書新聞 <第71号>

発行日 平成27年 9月1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー 2015

第4回

楽しかった夏休みも終わり。
さあ、読書の秋！スポーツの秋！
<編集部>

兼松 日向子さん(1年) 「猫のたま駅長」
木村 凜媛さん(1年) 「犬と私の10の約束」

——犬と猫の、定番中の定番みたいな本の読書感想文が出てきましたので、今日はお二人にインタビューです。

兼松 私自身も猫を飼っているのですがこの本に興味を持ちました。ローカル線の駅長をやっている猫の話は以前より聞いていました。

木村 私も、家で犬を飼っていて、犬との約束を考えたりしたのですがなかなか思いつかなくて…それで、この本を見つけて、参考にしようと思いました。

——動物の本はいいですね。心が和みます。この2冊を読みかえして、私の家にもいた犬や猫を思い出しました。どちらも数年前に死んでしまって、今、家の中はガラーンとしているので、余計に犬も猫も子どもたちもいて賑やかだった昔を懐かしく思い出したりします。

兼松 「たま」がすごいのは、人にさわられても、いやがったり、逃げたりしないことです。うちで飼っている猫は、お客さんが来るとすぐに逃げてしまいます。

——普通、猫はそうですね。犬なら、遊んであげると、体中から「うれしい！うれしい！」って気持ちが飛び散ってくるような感じになるけど、猫はちがいますよね。「しょうがないなあ…少しつきあっ

てやるか」みたいな、変な余裕がありますね。

兼松 ペットの歳にもよります。うちの猫は2歳の遊びたい盛りだから、自分でおもちゃを口にくわえて「遊ぼ！」って来たりします。

——10歳になると、もう人間でいえば60歳とか70歳っていう歳なんかもねえ。

木村 「犬と私の10の約束」を読んで、いちばん感動するところは10個目の約束です。「私がこの世を去るときは、そばにいて見送ってください」という。

——ああ、ありましたね。「あなたがそばにいてくれるだけで、私は幸せに天国へ旅立ってるから」という。

木村 どんなに贅沢に育てても、この最後の約束ができないと犬は幸せになれないんだと思います。なぜ、犬と人間の間には約束が必要なのか考えたのですが、それは、約束がなければ、犬も人間も楽しく暮らせないからだと思いました。

▼3ページ目へ続きます

京極読書新聞は
毎月1日発行です。





木村 凜媛さん
「犬と私の10の約束」
川口晴／著
(文芸春秋, 2007)

兼松 日向子さん
「猫のたま駅長」
西松宏／著
(ハート出版, 2009)



森口 翔太くん
「君ならできる」
小出義雄／著
(幻冬舎, 2000)

熊谷 那月さん
「蒼い炎」
羽生結弦／著
(扶桑社, 2012)



【訃報】 2015年6月22日、和歌山電鉄貴志川線の貴志駅（和歌山県紀の川市）で、ネコの駅長として人気を集めた三毛猫「たま」が入院中の動物病院で亡くなりました。雌の16歳。人間だと80歳程度に相当するといえます。同電鉄は24日、たまを「名誉永久駅長」とすることを発表。28日午後から貴志駅で社葬が行われました。たま、今までたくさん喜びをありがとう。天国でも幸せに。

——木村さんちの犬は、どういうところがいいですか？

木村 毛が「ふわふわ」なところがかわいいです。この本の犬「ソックス」よりもふわふわです。函館の防波堤で、ソックスとお父さんとあかりが静かに海を見ている場面が、私のいちばん好きな場面です。

——兼松さんちの猫は？

兼松 猫は「しっぽ」がかわいいと思います。あと、この本に出てくる、猫の「たま」を「駅長」にすることを思いついた小島社長もすごいアイディアマンだと思います。このアイディアが、廃線の危機にあったローカル鉄道を救うことになるのですから、世の中わからないものです。



森口 翔太くん(2年) 「君ならできる」 熊谷 那月さん(3年) 「蒼い炎」

——「君ならできる」。森口くんの読書感想文を読むまで、マラソンの高橋尚子選手の本だと思ってました。(表紙が高橋選手の写真だったもので…) プロ野球みたいな例を除けば、監督やコーチが自分で本を書くのって、珍しいですね。

森口 そうですね。僕のやってるスポーツ、クロスカントリースキーは、別名“雪上のマラソン”と言われるくらいなので、何かヒントになるものがあるかなあと考えてこの本を選びました。

——で、どうでした？

森口 いくつも共通点がありました。たとえば、練習にも強弱をつけるというような考え方。これは「人間の体に強弱のリズムがあるように、練習にも強弱が必要だ」という小出監督の考えから生み出されたトレーニング法なのですが、クロスカントリーでも同じような練習を行います。単調にずっと厳しい練習を続けるよりも、時には体を休ませ、大会前になると再び厳しい練習メニューに入っていくというようなトレーニングの方が良い結果を出すことが多いのです。

——なるほど。それから、熊谷さんが感想文を書いた「蒼い炎」の方にも勘違いがあって、私は、この本はソチオリンピックで金メダルをとったから記念に出版された本だと思っていました。でも、ちが

うんですね。ソチの前年までの羽生選手の日々をつづった本なんですね。

熊谷 そうです。4歳の頃、お姉さんの影響でスケートをはじめてから、19歳で全日本選手権で初優勝するまでの歩みが描かれています。でも、それ以上にこの本が大事なところは、羽生選手の人生に深い打撃を落とした東日本大震災のことがきちんと書かれていることです。

——そうですね。羽生選手ほど直接的に東日本大震災に向き合ったスポーツ選手っていないんじゃないでしょうか。今、この2015年に生きている私たちは、ソチオリンピックで羽生選手が金メダルをとったことを知っていますから、逆に、この本が出た2012年の頃の羽生結弦というひとりの青年の不安とか夢とかが想像しにくくなっているかもしれませんね。なんか、小さい時から天才だったんだろう…みたいな安易なイメージを抱きがちです。

熊谷 そんなことはないのは、本を読むとすぐわかります。避難所で過ごしている中で、「(被災者みんなが大変な中)僕はこのままスケートをつづけていいのか」「自分だけ好きなことをやっていいのか」と悩む姿も羽生選手の大事な一面なんです。

——そこから考えぬいて、被災者の方々を元気にするには、自分にはスケートしかない、オリンピックに出たいという夢が生まれてくるわけですから。なにか、こういう羽生選手の姿を見て、森口くんの感想文にあった“言霊（ことだま）”を思い出しましたよ。

森口 「君ならできる」の中で、小出監督は高橋尚子選手に、「おまえは一番になれる。絶対になれる。世界一になれる」と毎日のように声をかけていきます。はじめはあまり信じていなかった高橋選手

も、毎日言われると、だんだんその言葉を信じて練習を重ねて行くようになっていきます。驚くのは、その年の名古屋国際女子マラソンを日本最高記録で優勝したりと、本当に高橋選手に結果がついてきたのです。

——2012年の羽生選手の「オリンピックに出たい!」という気持ちには、その“言霊”を感じました。

熊谷 「練習する」ことの大切さをこの本から教えられたように思います。



インタビューは今回が最終回です。

京極読書新聞バックナンバー&取り上げられた本は、湧学館で読むことができます。

「小樽・海山めぐる」バスの旅

平成27年10月10日(土) 9:00~16:30



今年の後志文学散歩は、幻の建築を求めて、小樽の街を山から海から走りまわります。

受付開始：10月1日(木) 午前10時

申込締切：10月4日(日) *定員になり次第終了

定員：20名

参加費：2,500円

※参加費は当日の朝(午前8時50分頃)に集めます

※湧学館図書(電話 42-2700)へお申し込み下さい。

◎湧学館 午前9時出発～小樽・毛無山展望台～旧坂牛邸(田上義也記念室)～地獄坂～旭展望台(小林多喜二文学碑)～**昼食/ニュー三光「おこばち山荘」**店～ロープウェイ・天狗山山頂駅(天狗の館・小樽スキー資料館・しまりす園)～ザ・ガラススタジオ・イン小樽～千秋通り～オタモイ海岸(龍宮閣跡)～十間坂～手宮市場～ニッカウヰスキー余市蒸留所～湧学館 午後4時半頃到着予定

発行

京極町生涯学習センター湧学館

〒044-0101 京極町字京極158番地1

TEL 0136-42-2700(代表)

FAX 0136-42-2032

E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

